

世界遺産石見銀山 に架かる信仰の橋

らかんじ 羅漢寺のアーチ橋



関ヶ原の合戦の翌年の慶長6年（1601）、大久保長安が石見銀山奉行に任命されると、銀の産出額は急激に増大しました。当時のことを表わしたものに以下の文書があります。

「土稼※1の人数20万人、一日米穀を費やす事1500石余、車馬の往来昼夜を分たす、家ハ家の上に建て、軒ハ軒の下に連り、……
恐らくハ今日本の内此銀山に勝る所有ましくやと申し伝へり」

慶長から寛永年間（1596～1644）に最盛期であった石見銀山の盛況ぶりを記した『銀山旧記』です。当時の江戸の人口が約40万人ですから20万というのは疑わしい数字ではありますが、相当の賑わいがあったことは確かだと思われます。この功績によって、大久保は佐渡や伊豆の奉行、そして幕府の重要ポストにのぼりつめます。

2代目奉行竹村丹後の守の時代、代官所は山吹城の麓から現在の位置に移され、あわせて銀山川上流の蔵泉寺口から龍源寺間歩までを山内として銀山町、下流の代官所・城山神社付近までを政治・経済の場として大森町に区分されました。現在、銀山区域は人家もまばらですが、かつては生産の場、銀山労働者の暮らしの場でもありました。一方、大森区域には羅漢町、駒の足、新町、中市、下市、宮ノ前と続く1kmの間に伝統的な町並みが残っていることからその繁栄ぶりが想像できます。

大森町内に数多くある寺社仏閣のなかで、訪問者に大きなインパクトを与えるのが五百羅漢です。大森の観世音寺住職である月海浄印が、銀山で働いて亡くなった人の供養や安全のために発願したもので、田安中納言宗武卿をはじめ多くの寄進によって明和3年（1766）3月、25年で五百体が完成しました。この五百羅漢は羅漢寺向いの小川を挟んだ3つの石窟に安置されており、それぞれの石窟へは反り橋が架けられています。アーチを構成する輪石が橋面石も兼ねたシンプルな構造（ほぼ20cm角、長約2mの台形断面角柱石材約20本を円弧状に並べたもの）は、アーチの技術に長けていないと造れないもので、江戸時代九州からほとんど出なかった「アーチの技術」がどういった形で石見にまで伝わったかは不明ですが、これも銀がもたらした文化といえるのではないのでしょうか。



羅漢寺のアーチ橋

五百羅漢とアーチの石橋で知られる羅漢寺は明和元年（1764）の創建とされる。溪流沿いの洞窟に安置される五百羅漢は、銀山で亡くなった人々の霊を弔い、安全を祈るためという。

※1 土稼… 武士と銀山稼人の意。銀山師、掘子、一般庶民

■石見銀山遺跡の範囲



国指定史跡「龍源寺間歩」
江戸中期、代官所直営の間歩として操業。



大森銀山重要伝統的建造物群保存地区
鉱山に隣接して発展した江戸時代幕府直轄地の石見銀山附御料150余村の中心町。武家・商家の旧宅や、社寺などが混在してよく残る。昭和62年国指定。



羅漢町橋

五百羅漢から町並みに向かう道の銀山川に架かる羅漢町橋（明治元年建造）。大江高山火山の溶岩が使用されている。